

詩とその言語：ワーズワスの詩論を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学会 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): ワーズワース, ワーズワス キーワード (En): 作成者: 岡田, 昌夫 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180221-169

詩とその言語

——ワーズワスの詩論を中心として

岡 本 昌 夫

詩が言語を媒介とする芸術であり、しかも詩の内容と外形とが合致することを以てその理想的状態と考ふる以上、詩と言語の問題は、詩に於ける最も重要な問題であり、詩が初まって以来考えられて来た問題であると共に、詩が存する限り論ぜられる問題であるといえよう。誠にこれは、詩学の祖アリストテレスの問題であつたと同時に、今日T・S・エリオットやI・A・リチャーズの問題でもあるのである。

しかし一口に詩と言語の問題といつても、問題の範囲は頗る広く、到底短時間に論じ尽し得る性質のものではない故、私は今、ワーズワスの詩語論、殊に「抒情詩集」(Lyrical Ballads)の序文に現われた詩の言語と日常の言語との関係の問題を取上げ、簡単な考察を加えて見たいと思う。

詩には詩に適する言語があり、散文及び日常語には又それに適する言語があつて、その間には確然たる区別があるとする考えは、アリストテレス以来の考えであつて、英国に於ては久しく当然の考えとして容認され、極めて僅かの例外を除いて(ダンやドライデンはその僅かの例外である)殆んど問題にされることなく十九世紀に至つたといつてよからう。

アリストテレスは、「詩学」(Poetics)第二十二章に於て、詩人はその文体(スタイル)(*Ætius* = style or mode of speech)を明晰(クリア)にすべきであると共に下品ならざるものにしなければならぬと説いているが、その場合、日常の会話の文体は最も明晰で

あるけれども下品なものであつて、その会話の言葉をそのまま詩の言葉とすることは好ましくなく、その下品さを脱れるために、稀少語、隠喩、其他日常の慣用語を離れた語を用いねばならぬと云つたり、長く引延されたり、短く切りつめられたり、故意に改められたりした語を用いねばならぬと云つたりしている。これは明かに詩の言語を日常の言語を離れた特殊のものと考えている証拠である。又彼の「修辞学」(Rhetoric)に於ても、詩は明晰、正確であると同時に気品或は威厳 (Elevation or dignity) をそなえる必要があると説き、この故に「詩の文体は散文の文体と區別される」(III. i. 9) とはつきりと述べているのである。⁽¹⁾

このアリストテレスの考えは、彼の書物に由来する他の諸々の思想と共に、久しく英国に於ける文芸思想の上に影響を及ぼし、殊に十八世紀に於ては、その世紀特有の詩語論を培うに与つて力があつたと考えられる。

私がここにいう十八世紀特有の詩語論というのは、十八世紀全般を通じて作詩の常識となつていた「詩には詩特有の語を用いる」という考であり、ワーズワスが特に問題とした「詩語」肯定の思想である。

「詩語」(Poetic Diction)なる語はワーズワスが初めて用いたわけではなく、十八世紀の批評家 John Dennis や詩人ポープが既に早くから用いており、⁽²⁾その意味は必ずしも一定していないが、要するに「特に詩に適すると考えられて詩のみに用いられる用語、或はその語法」を意味するといつてよからう。ポープは、彼が翻訳したホーマーを「詩語の父」であるといひ、ホーマーが特に愛用した複合形容辞 (Compound-Epithets) をその証左として、「ホーマーは、彼の言語を散文から一層引き離すために、複合形容辞を愛用したと考えられる」と述べている。⁽³⁾即ち、ポープは、所謂「詩語」は、詩と散文を區別し、詩を愈々詩らしきものにすると考えたのである。

詩の用語に関するかような考えは、ひとりポープのみのものではなく、広く十八世紀詩人達一般に共通のものであつたといつてよく、その証拠は至るところに見られる。

トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) のような浪漫主義の先駆と呼ばれる詩人に於てさえ、この考えは確乎として

動かし難いものであった。彼は一七四二年友人リチャード・ウェスト (Richard West) に宛てた手紙のうちに於て、詩と散文の言語の相違を次のように表現している。

「文体のことについて私は次のようにいうことが出来る。即ち、時代の言語は決して詩の言語ではないと。(The language of the age is never the language of poetry.) ただ例外としてフランス人の間では、詩は思想や形象ソート イメージが詩であることを可能にしない限り、散文と何等異るところがない。これに反してわが国の詩は、詩独自の言語 (a language peculiar to itself) を持つものである。」⁽⁴⁾

即ちグレイは、詩の言語というものは時代の一般の言語、即ち一般民衆の話し言葉や散文の言葉と違ったものであつて、詩は詩特有の言葉によって成り立つものであり、詩を散文と区別するものは、単に「思想や形象」のみではないと考へていたのである。

コリンズ (William Collins) は又その「オード集」(Odes, 1747) のタイトル頁にピンダーの「われ詩語の工夫者とならん…」なる文句をモットーとして附け加え、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) も亦、「他の作品と区別された詩」(Poetry distinguished from other Writings) と題された論文に於て、「どの言語にも、特に詩的表現に適した或る語彙ワーデンがある。或るものは、それが想像力に訴える心象と概念の故に、又或るものは、それらが耳に与える効果の故に」⁽⁵⁾と述べているが、何れも明かに「詩語」肯定の声であるといつてよからう。

而してかような考へが実際の詩に於て如何に実践されているかは、詩華集、例えば *Oxford Book of English Verse* でも見れば明かであり、又その「詩語」の性質乃至様相を詳しく研究したものとしては *Thomas Quayle: Poetic Diction* —— *A Study of Eighteenth Century Verse*, London 1924 其他を挙げる事が出来るが、今はその詳細に立入るいとまがない。⁽⁶⁾

かように詩語が肯定され重視されたについては、それ相当の理由があり、G. Tiltonson もいうように全然その効果がな⁽⁷⁾

いわけではなく、殊にその音楽的効果は注目すべきものであるけれども、それを肯定し、それを発展させるならば、詩的想像力を萎縮せしめ、詩の生命を圧迫すると共に、詩を大衆から遊離せしめ、詩を或る特定の人々の玩具とする危険に陥るのである。今日十八世紀の英詩が一般の人々に親しまれない最大の原因は、この詩語過剰の故であるといつてよからう。

兎に角十八世紀に於ける「詩語」の考えは実に根強く当時の詩を支配し、これに反抗して一般大衆の言語を用いて大衆の生活を歌い出そうとすることは極めて大胆なことであつて、詩壇に於ける一大革命であり、凡庸の才を以てしては到底達成し難い大事業であつたのである。十八世紀末から十九世紀初頭にかけてこの大事業を理論と実践の両面に於て立派に成し遂げたのが、ウィリアム・ワーズワスであつた。彼は、若年の詩 *Descriptive Sketches* 及び *Guilt and Sorrow* に於ては、未だ十八世紀的詩語の伝統を脱することは出来なかつたが、一七九八年「抒情詩集」*Lyrical Ballads* を出版するに及んで、敢然とこの大事業と取組み、詩に於ける言語の革命を己の任務としたのである。¹⁸⁾

ワーズワスは周知の通り、一七九〇年フランスに渡り、高潮した革命の現実を目のあたりに見て深い感銘を覚え、民主的精神に徹し国民大衆の意味の重要さを悟つたのであつたが、帰国後もゴドウィンなど社会主義的思想に共鳴して、「人間、自然、と共に社会」を深く考え、詩人としての自己の任務についても、その社会的意義を深く反省していたのである。即ち、ワーズワスは、早くより、文学は一部の人々のためのもではなく、一般大衆のためのもであり、従つて、それは大衆の言葉を以て大衆の生活を描いたものでなければならぬと考へて居り、長い歴史と伝統のある英詩に於ても、これは実現されねばならぬと信じていたのである。「抒情詩集」は実に、かような思想的背景を以て書かれたものであり、その「序文」は、この思想の上に立つ詩論を展開したものであつた。

このワーズワスの詩論は一七九八年の「抒情詩集」初版の「はしがき」ともいふべき「Advertisement」に於て既に簡単に

述べられている。そこに於ては、

「次の詩の大部分は実験 (experiments) であると考えていただきたい。それらの詩は主として、中流及び下流階級に於て用いられる会話の言語 (the language of conversation in the middle and lower classes of society) が、どの程度まで詩の目的、即ち詩的歎喜を与えるという目的に適するかを確かめるつもりで書かれた」と述べられ、大衆の言語によって書かれた詩が、どの程度まで成功するかを自ら真剣に試みようとした意図が明瞭に示されているのである。⁽⁹⁾

然しながら、この「はしがき」は三頁にも満たぬ短文であつて、その意を充分に尽していないうらみがあり、かつ「抒情詩集」初版は思わぬ誤解を受け、悪評を蒙つたことにかんがみ、充分に意を尽して詩集出版の真意を明かにする必要に迫られたため、一八〇〇年の詩集第二版には、今日一般に広く知られるあの長文の序文 (Preface) が書かれたのである。

この「序文」は「抒情詩集」に関連して詩の題材と言語の両面に亘つて、ワーズワスの詩観を詳細に論じたものであつて、今これを詳論するいとまはないが、要するに、詩の根本義から、詩は如何なるものであるべきか、又その言語は如何なるものであるべきかを論じたものであるといふことが出来る。くだいていえば、詩は民衆のためのものであり、民衆の言葉によって民衆の生活を歌つた詩こそ本當の詩である点を強調したものであるといふことが出来る。そして先の「はしがき」に於て、この詩集が、詩の言語についての実験である点が強調されたが、この「序文」に於ても亦、詩の言語の問題が中心問題となつて議論が進められているといつてよからう。ただこの「序文」に於ては、詩語の問題が詩の主題の問題との関連に於て徹底的に論ぜられ、議論は綿密であり、用語は用意周到に行届いて、詳細に述べられている。例えば先に引用した「はしがき」に相当する部分は次のように述べられている。

「これらの詩の初版本は既に一般の愛読を受けている。私はその書物を一つの試みとして出版したのであるが、それによつて私は、生々と物に感じる状態にある人々が実際に用いる言語を選択し韻律よく配置することによつて、詩人が与えようと努力しても不当でないと思われる種類の喜びと、不当でないと思われる程度の喜びとを、どの程度まで与え得るか

を確かめるのに、何らかの役に立つことを希望したのである。

先の「はしがき」に於ては、ワーツワスの詩の大部分が、「中流及び下流階級に於て用いられる会話の言葉」によって書かれたと述べられているに對して、この「序文」に於ては、「生々と物に感じる状態にある人々が実際に用いる言語を選択し、韻律よく配置することによって」書かれたと述べられている点が特に注意されねばならない。「中流及び下流階級」という文字が姿を消し、それが一般の庶民の意味を表わす「人々」(men) という表現に代えられ、それに「生々と物に感じる」という形容の言葉が附されているばかりでなく、その人々の實際の言語を「選択し韻律よく配置することによって」書かれたと非常に用意周到で行届いた表現になっている。更に注意すべきは、この序文に於ては、先の「はしがき」に於て述べられた表現よりは、より一般的普遍的な表現がなされ、この詩集に關連してものをいっていないながら、詩一般を論ずるといふ趣が見られ、詩とその言語の本質並びにその根源に關する一段と行届いた配慮がなされているのである。この「抒情詩集」の序文を以て、そこに収められた詩と無關係な一般の文學論と解釋することは勿論誤りであるけれども、この序文を非常に特殊な詩に關する特殊な議論と解して、一般性を持たぬものと解することも當を得ていないと思われる。以上の短い引用のみについても、ワーツワスが、この序文に於て、彼の持つ詩の根本思想を出来るだけ普遍妥當な形で表現しようとした用意が窺われるのであるが、更にこの序文全体を詳細に検討するならば、彼の真意が一層明瞭に見られるのである。

さてワーツワスは、かように慎重な配慮の下に、詩とその言語のあり方について、彼の年来の抱負を述べているのである。先に述べたように、ワーツワスがこの「序文」に於て特に力説している点は、彼が自己の詩作に關して、従来殆んど盲目的に遵奉されて来た「詩語」の伝統に反對し、一般大衆の話し言葉を選択して大衆の生活、殊に土に親しむ醇朴な田舎人の生活を写すことを本義としたということであつた。ワーツワスによれば、「善き詩は、力強い感情が自然に流露した

もの」であり、その力強い感情は、田舎に住んで都会の虚偽に染まぬ醇朴な田舎人に於て最も純粹強烈に把持されるが故に、それらの人々の生活を写すことを本義とし、更にそれらの人々の言語は純粹素朴なるが故に彼等の生活を写すに最も適するといふのである。田舎人の言葉を以て田舎人の生活を写すといふのは、ワーズワスの「抒情詩集」中の詩の實際に關連して述べられた言葉であつて、その底を流れる一段と普遍的な思想は、詩の言語は力強い感情を表現し得るものでなければならぬといふことであり、特に詩に適する言語或は詩特有の言語といふようなものはあり得ないといふ考えであり、民衆の言葉こそ詩に最も適する言葉に他ならぬといふ考えであらう。

然しながら、詩を一般大衆の日常の言語によつて書くといふことは、一面に於て詩の品位を落し、詩的效果を削減する怖れのあることも否定し難いことである。我々の日常の会話の言葉というものは、アリストテレスが既に指摘しているように下賤な性質を帯び、野卑で聞くに堪えぬ場合が往々にしてあるのである。口言葉が下品で野卑なことは、今日流行の漫才や落語が明瞭に示しており、二葉亭四迷は口言葉の下品さの故に、言文一致体文学に行きつまつたといわれるのである。

口言葉の欠点は単にそれが野卑であるというだけではない。それはそれが口頭で早急に述べられる性質上当然に荷つてゐる幾つかの難点を持つのである。即ち、我々は口言葉の難点として、

一、語彙の貧困

二、音楽的効果の稀薄

三、壯嚴性の稀薄

四、科学的、論理的叙述の困難

五、語句の意味の單純

六、雰囲気醸成の困難

七、視覚的効果の不備

等を挙げる事が出来るのである。これらの一々について詳論するいとまはないが、これらの難点が重なり合つて、口言葉というものを詩の言葉と區別させることになるのである。

ワーズワスは勿論これらの口言葉の難点に気づいており、民衆の口言葉そのままが詩であるとは考えず、その口言葉を適当に選択することによってそれらの難点を克服し、単純素朴であると共に人間の真の熱情を表現する純粹な詩を作るとを考へていたのである。詩が優れたものであるためには、それが民衆の言葉によって書かれるというだけではだめであつて、そこに適当な選択がなされ、快的なリズムが与えられねばならぬことはいふまでもないことである。

ただここに問題となるのは、この「選択」という点に重点を置いて考へる時、言語は次第に口言葉を離れ、「詩語」をも容認しようとするに至るのではないかということである。ワーズワス自身その詩に於て、一〇〇パーセント日常の言語によつて書いているわけではなく、又「序文」に於ても、先に引用した「人々の本当の言語の選択」(a selection of the real language of men)なる語を後に再び引用するに當つて「出来得る限り」(as far as is possible)という限定を附している位であるから、彼の理論を何の融通もなく機械的にあてはめようとは考へていなかったのであつて、口言葉に適當な表現を見出し難いような場合は若干の文語的表現も止むを得ないと考へていたと考へられるが、然しながらこの事實はワーズワスの詩語論の根底をなす、日常会話の言語を以て詩の言語とするという原則を破るものではないのである。十八世紀の詩語論に於ては、詩は「詩語」を用いることによつて愈々詩的になると考へられ、詩の言語は「詩語」の方向に向つていたのであるが、ワーズワスの詩語論に於ては、詩の言語は出来得る限り日常の言語に近づくことなのであるから、全く方向を異にするということが出来るのである。コールリッジはその「文学的自伝」*Biographia Literaria*に於て、ワーズワスの詩語論は或る種類の詩にあてはまるだけであるといつてその不当なことを説いたが、ワーズワスの説を詩の言語が一般大衆の日常の言語に近づくかねばならぬという詩一般に関する根本原理を説いたものと解する時、それは不変の真理

であるといわねばならない。そしてこれは、「詩人は詩人のみのために書くのではなくて、一般の人々のために書くのである」という詩人の詩作態度から来る当然の帰結であつて、これはひとりワーズワスだけに限らず、心ある詩人の総てが念願し、希望することであらう。⁽¹¹⁾

この詩語に対する根本原理から、ワーズワスが言ったように「散文の言語と韻文作品の言語との間には本質的相違はなく、又あり得ない」という結論も出て来るのである。詩はアリストテレスもいうように「総ての書きもののうちで最も哲学的なものである」⁽¹²⁾けれども、その表現に特別の言語があるわけではなく、散文の言語と異ならない一般大衆の日常語が用いられねばならない。ただそれが詩であるためには、詩の内容が思想的に一段ときびしい鍛錬を経たものでなければならぬと共に、その言語は一段と嚴重な選択と練磨を経たものでなければならぬのである。近ごろの詩人は、ワーズワスの詩語論を更に押し進めて、「詩は散文と同様に書くべきである」⁽¹³⁾と主張し、又その通り実践している人々も多いが、然し詩を散文と区別し、詩の特質を認めようとするならば、そして内容と外形の一致を以て詩の理想とするならば、詩の言語にはきびしい選択と練磨が加えられねばならぬのは当然のことである。ワーズワスが、民衆の日常会話の言葉を以て詩の言葉とすべきことを説くと共に、言葉の選択ということを重視し、そのことにふれることに選択という語を忘れず用いていることは、殊に注意すべきことであると思われるのである。ワーズワスを詩人たらしめているのは、実にこの言葉の選択の意識であるということが出来よう。

この言葉の選択の問題についても、更に色々と突込んで考察しなければならぬのであつて、その選択の規準、選択の主導力、言葉の選択に於ける韻律的感覚等、考えるべき問題は数多いが、今はそこまで立入って論ずるいとまがない。何れも後日の研究に俟ちたいと考える。

又ワーズワスの詩語論を中心として我々が考えるべき問題も決して一、二に止まらないのであるが、私が今取上げた詩

の言語と民衆の言語との関係の問題はその最も重要なものの一つであることは間違いないことである。この問題を現代の英詩及びその理論と関係させて論じたいと考えたのであるが、これも亦将来の課題として残さざるを得なかった。(以上は昭和三十三年五月二十六日立教大学に於て開催された日本英文学会第二十九回大会に於て発表したものである。)

註

- (1) S. H. Butcher : *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art*. London, 1927. P. 81
W. H. Fyfe : *Aristotle's Art of Poetry*. Oxford, 1952. P. xxix.
Aristoteles : *The Art of Rhetoric*, with an English translation by J. H. Freese (Loeb Classical Library) Cf. J. W. H. Atkins : *Literary Criticism in Antiquity*, vol. i. Cambridge, 1934.
- (2) John Dennis : *The Advancement and Reformation of Modern Poetry*, 1701, ch. v.
Alexander Pope : *Preface to The Iliad*, vol. i, 1715.
Cf. Bateson : *English Poetry and the English Language*, Oxford, 1934, p. 71.
- (3) Pope : *Preface to The Iliad*. (World's Classics, p. xii) Cf. also Postscript to *Odyssey*, 1726.
- (4) *Letters of Thomas Gray*, ed. by Tovey (1900) vol. ii, pp. 97-8. *Correspondence of Thomas Gray*, ed. by P. Toynbee and L. Whibley, 3 vols. (1935) vol. i, p. 192. *English Critical Essays*, XVI-XVIII (World's Classics) p. 310.
- (5) Goldsmith : *Miscellaneous Works*, ed. by D. Masson (Globe Edition) London 1908, pp. 326-329.
- (6) Thomas Quayle : *Poetic Diction — A Study of Eighteenth Century Verse*, London, 1924. Cf. Bateson : *English Poetry and the English Language*, Oxford, 1934. H. C. Wyld: *Some Aspects of the Diction of English Poetry*, Oxford, 1933.
尚クエイルによれば「詩語」では the wooly breed (sheep), the industrious kind (bees), the wandering nation of a summer's day (insect), the beautiful kind (women) などの所謂 stock diction (きまり文句) や vernal bloom, lucid stream, starry sphere などの美辞麗句、並びにラティニズム、古語、複合形容詞、疑人法、抽象法、などの、散文には用いぬ特殊な詩的用語及び詩的用語法を指すのである。
- (7) G. Tillotson : 'Eighteenth Century Poetic Diction' in *Essays and Studies by Members of the English Association*, XXV (1939)
ティロットソンは、十八世紀に「詩語」が重視されたについては、当時盛んに流行していた野卑下劣な「笑劇」'farce' に対するプロテ

ストの意味があることを語っているか、ワーズワスの詩の題材や言語の選択についての動機と比べ会せて興味深いことである。

- (8) 以下 Wordsworth の 'Advertisement' 及び 'Preface' の引用は *Wordsworth's Literary Criticism*, ed. by Nowell C. Smith, London, 1925 によるが、¹⁾ *The Prose Works of W. Wordsworth*, ed. by the Rev. Alexander B. Grosart, London, 1876, vol. ii, & *The Poetical Works*, ed by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Oxford, 1940-49 其他の詩集にも附録として収められている。

以下特に註をしない引用文は総て、'Preface' よりの引用である。

- (9) *Op. cit.* p. 1.
- (10) *Biographia Literaria*, ch. xvii. Shawcross's edition, ii, pp. 29-30.
- (11) Cf. T. S. Eliot : *The Use of Poetry and the Use of Criticism*. London, 1933. Conclusion, & etc.
- (12) Butcher, *op.*, p. 35. 原文によれば「詩は歴史よりもより哲学的な、より高級なものである」というのであるが、ワーズワスは引用文のよびに拡張して用いている。
- (13) T. S. Eliot: *op. cit.*, p.71. Cf. F.O. Matthiessen : *The Achievement of T. S. Eliot*, London, 1935.